

『ヘボン在日書簡全集』の出版に寄せて

岡部一興

ヘボン研究

ヘボンと聞くと、ローマ字のヘボンという答えが返ってくる。数多く来日している宣教師のなかでヘボンほど親しまれている人物はいないと思われる。そのヘボンを有名にしたのは他ならぬ故高谷道男先生といえよう。まず高谷先生は、1954年6月に『ドクトル・ヘボン』を牧野書店から出版、続いてヘボン来日100年の1959年10月に『ヘボン書簡集』を岩波書店から出版した。また2年後の1961年3月に『ヘボン』を吉川弘文館の人物叢書として伝記を出している。さらに、1976年10月にヘボンが牧師である弟に宛てた私信を『ヘボンの手紙』という形で出版した。これ等の書を通して、ヘボンの名を広めた功績は計り知れないものがある。

高谷先生は1956年6月から3ヶ月間ニューヨークに滞在、ミッション・レポートを調査した。アメリカ長老教会外国伝道協会、フィラデルフィアの長老派歴史協会、ニュージャージー州にあるラトガーズ大学とニューブランズウィック神学校の図書館、プリンストン大学の図書館を調査し、ヘボンや S. R. ブラウン、フルベッキなどの書簡を収集した。その後、ヘボンの弟スレーター・ヘップバーン牧師の孫娘ドーリー・ヘップバーンから弟に宛てたヘボンの私信を譲り受けたのである。これ等の資料をもとに、『ヘボン書簡集』、『S. R. ブラウン書簡集』、『フルベッキ書簡集』を次々に出していった。こうして日本プロテスタント・キリスト教史の代表的な宣教師の書簡を著したことによって、宣教師がどのような伝道活動をしたかの足跡が書簡を通して明らかにな

り、これによって日本のキリスト教史が大きく前進した。

先生はいつもオリジナルな資料に基づいて研究することの大切さを強調していた。ヘボンに研究するようになった動機は、太平洋戦争末期の昭和19年に旧制の専門学校が理科系として転換された時に、青山学院と関東学院が工業専門学校になり、青山学院の文学部と高等商業部、関東学院の高等商業部が明治学院に吸収される形になった。関東学院の教授であった高谷先生は学生を連れて明治学院に移ることになった。その時、図書館の責任者になりヘボン資料が空襲で燃えては困るので東北学院に運ぶことになった。風呂敷包みに資料を入れて明治学院の杉本民三郎幹事と二人で交代で担ぎ上野から仙台まで運んだ。それ以来ヘボンを担ぐようになったという。

235通の書簡

今回『ヘボン在日書簡全集』に収録した書簡は235通にのぼる。その中身はヘボンが在日33年間にアメリカ長老教会のミッションに書き送った公式書簡で、ヘボンが手紙を書くことが出来なかった時、クララ夫人が書いた手紙も18通含まれている。またヘボンが帰国後、山本秀煌や井深棍之助、毛利官治などに送った書簡が20通含まれている。1959年に出版された『ヘボン書簡集』には、121の書簡が収められている。90数通の書簡が翻訳されていなかったため、『ヘボン書簡集補遺』という形で出版を計画していた。しかし、補遺を出しても読者は、絶版になっている『ヘボン書簡集』に入っている手紙を読みたくなるだろうと考え、それではこれ等の書簡を全て暦年順にして33年間の手紙を並べてみたらどうかという発想になった。この考え方に教文館の渡部満社長が賛成して下さり、出

版の意義を汲み取って頂き、岩波書店の社長に掛け合い出版権を譲り渡して頂いてこのような本を作ることが出来た。

この翻訳は1984年頃、指路教会の有地美子さんに同じ会員である高谷さんがヘボンのマイクロフィルムの手紙をタイプにして欲しいと依頼し、さらに翻訳することを頼んだ。それから、毎週のように日曜日教会で高谷さんに翻訳した手紙を手渡していた。今回、ヘボン来日150年という節目の年に出版できたことは喜びに耐えない。基本的に『ヘボン書簡集』に収録された訳はそのままとし、新たに年表と注をつけ、人名索引を加え、まえがきと解説を書き暦年順に編成し直した。

今回、『ヘボン在日書簡全集』としてまとめたものは、33年間の日本における活動を網羅しているため、ヘボンの実像がこれらの手紙を通してより鮮明になるのではないかとと思われる。またヘボンの日本における功績を見る場合、ヘボンの陰で支えた妻クララの事が見落とされていたが、クララの手紙を通してヘボンの姿がより鮮明になると思われる。なお、『ヘボン在日書簡全集』の内容そのものについては、紙数の関係で述べないが、どうぞ皆様に読んで頂いてご批評を頂きたいと思うものである。

(おかべ・かずおき 協力研究員、本学非常勤講師)

